ISUZU

ISUZU LOGISTICS Co., Ltd.
Sustainability Activities



2026

ISUZU GROUP

ISUZU LOGISTICS

物流拠点でのクリーンエネルギーへの転換（1/2）

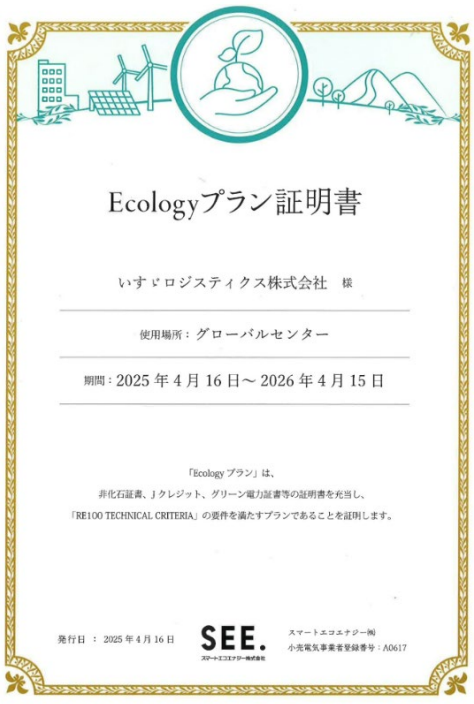
2025年に開催された大阪・関西万博関連のEVバス補修部品供給にも携わったいすゞロジスティクスでは、いすゞグループの「2030環境ロードマップ」に掲げる、2030年までに事業活動におけるCO_2排出量（Scope1＋Scope2）を2013年度比で50%削減する目標の達成に向け、実効性のある施策を検討していました。

一方で、多くの拠点が賃貸物件であることから、太陽光発電パネルなどの大規模設備の導入には制約がありました。こうした状況を踏まえ、再生可能エネルギー由来の電力への切り替えについて検討を開始しました。

再エネ電力への切り替えにより、一部拠点ではコストの増加も見込まれましたが、会議体ではSDGsやLNOB（Leave No One Behind：誰一人取り残さない）の観点から議論を重ねました。その結果、拠点間・部署間の垣根を越え、物流拠点全体での最適化を優先することで、脱炭素化に向けた取り組みを推進しました。

これにより、9拠点において、物流拠点全体の電力使用量の70%にあたる年間約620万kWh相当を、再生可能エネルギー由来の電力へ切り替えました。

本取り組みは、環境負荷の低減に加え、従業員の環境意識の向上にもつながっています。従業員からの提案を受け、再エネ電力供給証明書を拠点の入口に掲示するなど、再エネ電力への切り替えを契機に、環境配慮への姿勢を社内外へ発信する活動にもつながっています。







再エネ電力供給証明書

ISUZU LOGISTICS

物流拠点でのクリーンエネルギーへの転換（2/2）

また、環境負荷低減の取り組みとして、モータープール（車両の一時保管場所）においても、拠点特性を踏まえた省エネルギー化を進めています。水銀灯からLED照明への切り替えを進め、全モータープールへの導入を完了しました。

さらに、昼間に太陽光発電で蓄えた電力を夜間に活用するソーラーライトも順次設置しています。モータープールは工場や倉庫と比較して電力使用量が少ないことから、LED照明とソーラーライトを併用することで、拠点特性に応じた電力使用量の抑制を図っています。

今後も、各拠点の特性に応じた再生可能エネルギーの活用や省エネルギー化を進め、環境負荷の低減と安全で働きやすい職場環境の両立を目指していきます。



モータープールのソーラーライト

資源循環推進

ISUZU LOGISTICS

梱包・包装資材の削減：資源循環の拡大（1/2）

いすゞロジスティクスでは、資源循環活動の一環として、物流現場で使用する包装・梱包材の削減やリサイクルの拡大に取り組んでいます。

国内の2拠点間で包装された部品を搬送する際には、屋外作業時の雨濡れを防ぐため、2段式台車に雨避けカバーを設置しています。従来は、カバー内の部品の荷崩れや落下を防ぐため、カバーの上からストレッチフィルムを巻いて固定していましたが、搬送後には使用したフィルムを廃棄しており、廃棄物の発生が課題となっていました。

そこで、2024年10月より、使い捨てのストレッチフィルムから繰り返し使用可能なラッシングベルトへ変更しました。これにより、ストレッチフィルムの廃棄量を年間約5トン削減しました。

また、従来は高さ50cm、重量2kgのストレッチフィルムを持ち上げながら台車に巻き付けていた作業が、軽量なラッシングベルト2本で固定できるようになり、作業負荷の軽減や作業効率の改善に加え、荷崩れ防止にもつながっています。



（変更前）ストレッチフィルムを巻く作業



（変更後）ラッシングベルトを巻く作業

ISUZU LOGISTICS

梱包・包装資材の削減：資源循環の拡大（2/2）

さらに、2025年度からは、藤沢・栃木拠点で使用したストレッチフィルムのループリサイクルを開始しました。使用済みのフィルムを分別し、再利用に適した透明で汚れのないフィルムを資材メーカーへ引き渡しています。

回収されたフィルムは資材メーカーにて、再生原材料へ加工され、再び同じ用途のストレッチフィルムとして製品化されます。これにより、年間約51トンの使用済みストレッチフィルムを廃棄からループリサイクルへ移行し、資源の循環利用を進めるとともに、新たな原材料の使用抑制やCO_2排出量の削減にもつなげています。

また、2025年度からは全国の部品配送センターにおいて、廃棄物処理方法の見直しを行い、これまで一般ごみとして処理されていた段ボールなどの紙類について、リサイクル可能な処理ルートへの切り替えを進めました。これにより、年間約88トンの紙類をリサイクルへ移行しました。

さらに、全国の部品配送センターへの補充部品に添付していた帳票類についても見直しを行いました。従来は、指示伝票の上にカラーの行き先帳票を貼付していましたが、指示伝票自体をカラー化することで行き先帳票を廃止し、年間約5万枚の印刷物を削減しました。こうした取り組みを含め、2025年度は補給部品にかかわる業務全体で、印刷物を前年度比約10%、年間約17万枚を削減しました。

今後も、包装・梱包材の削減や使用済み資材のリサイクル、ペーパーレス化を継続的に推進し、資源の有効活用と廃棄物の削減を通じて、循環型社会の実現に貢献していきます。



生産拠点のリサイクルセンター（右列がループリサイクル用ストレッチフィルム）

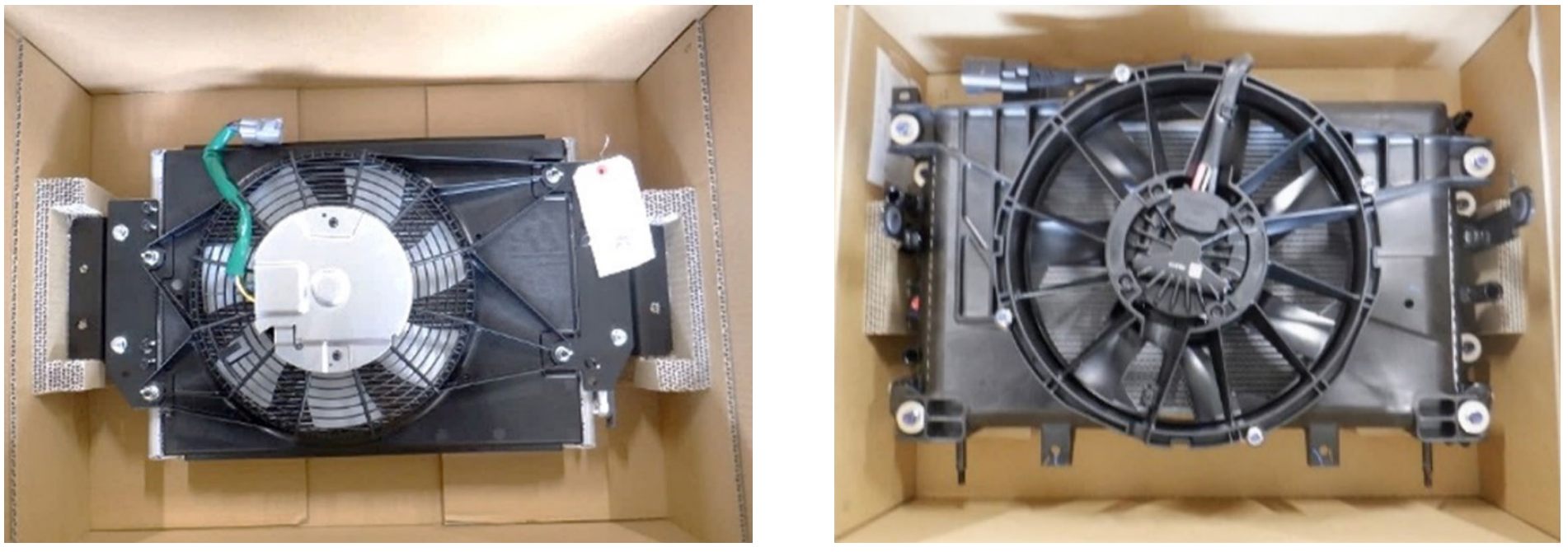
梱包・包装資材の削減：プラスチックから段ボール固定材への切り替え（1/2）

いすゞロジスティクスでは、持続可能な社会の実現に向け、包装・梱包材における環境配慮設計を推進しています。

2024年度には、初のEV車のノックダウン（KD）生産に伴い、車両コンセプトに合わせた環境配慮型資材の開発・採用を本格的に開始しました。従来、包装・梱包仕様を設計する際、部品の固定材には石油化学由来のプラスチック発泡材を主に使用していました。

しかし、EV車の車両コンセプトに合わせ、石油化学由来の資材の使用を削減するため、日本国内で95%以上がリサイクルされている段ボールを活用した固定材の採用に取り組みました。段ボール固定材は発泡材と性質が大きく異なるため、従来にはない新たな発想や工夫が必要となりましたが、チーム全体で試作と検証を繰り返し、採用を拡大しています。この取り組みを通じて、環境配慮設計に関するノウハウの蓄積や技術力の向上に加え、環境に対する意識の向上にもつながっています。

品質、コスト、作業性、運用などの課題について、資材メーカーや関係部署と連携して検証を重ね、2024年6月よりEV車のラジエターを含む8部品に段ボール固定材を導入しました。これにより、プラスチック発泡材の使用量を年間308kg削減しました。



段ボール固定材を使用した部品包装

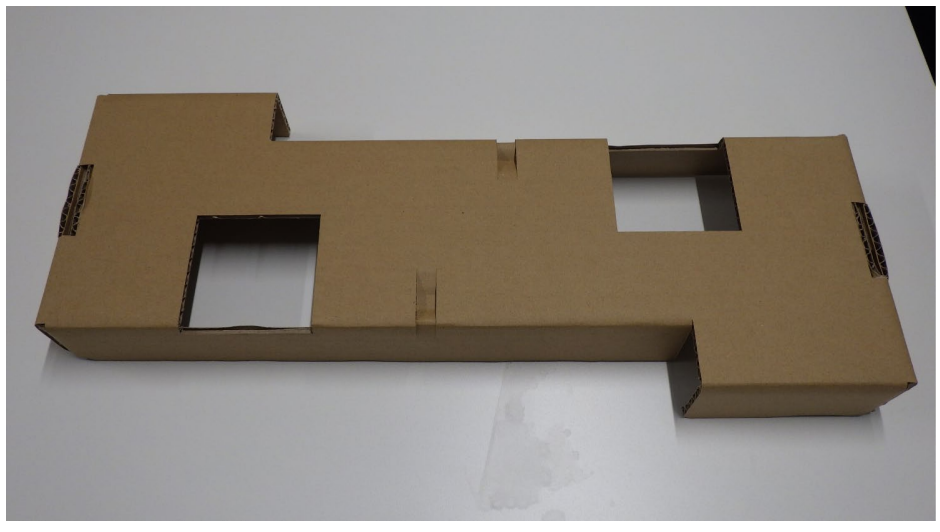
ISUZU LOGISTICS

梱包・包装資材の削減：プラスチックから段ボール固定材への切り替え（2/2）

2025年度には、積層段ボールに加え、ハニカム段ボールや組立式段ボール固定材など、多様な環境配慮型資材の導入検討を進めました。コストと作業性の両立を重視し、現場で試作・検証を重ねた結果、新たに3件の段ボール固定材の導入につなげました。

さらに、これまで段ボール固定材の適用が難しかった大型部品にも対象を拡大し、排気系後処理装置（DPD）について、資材メーカーと共同で大型段ボール固定材の開発を進めています。

今後も、品質、コスト、作業性、安全性との両立を図りながら、環境配慮設計を推進し、石油化学由来の資材の使用削減や環境負荷の少ない資材への切り替えを通じて、資源の有効活用と循環型社会の実現を目指します。





段ボール固定材を使用した部品包装

ISUZU LOGISTICS

梱包・包装資材の削減：リターナブルラックの導入拡大（1/2）

いすゞロジスティクスでは、物流に使用する梱包資材の廃棄物削減と資源の有効活用に向け、包装・梱包、輸送から海外工場での使用、廃棄までのライフサイクル全体を考慮し、繰り返し使用できるリターナブル資材の導入を推進しています。

中でも、すべての仕向地で共通して使用可能なリターナブルラックについては、2017年度から導入を進め、国内外の工場間における部品輸送などに順次展開しています。これにより、海外の組立工場で廃材となっていたノックダウン（KD）部品用ワンウェイラックの使用を削減し、梱包資材の廃棄物削減と資源の有効活用につなげています。

さらに、2019年度には、単体重量を従来比33%削減した軽量型リターナブルラックや、コンテナ内の充填率向上を目的とした高さの異なる2種類のラックを開発し、2023年度には主要仕向地への展開を完了しました。



リターナブルラック

ISUZU LOGISTICS

梱包・包装資材の削減：リターナブルラックの導入拡大（2/2）

従来、木製のワンウェイ仕様であったキャブ用ラックについても、鉄製のリターナブルラックへ変更しました。使い捨てから繰り返し利用する仕組みへ転換することで、木材などの資源使用量と廃棄物の削減を図るとともに、廃棄時に必要だった釘抜きなどの木材解体作業が不要となり、作業時の安全性向上にもつながっています。

また、2021年度からは、完成キャブをコンテナに積載する際に生じる空きスペースを有効活用するため、キャブ用ラックの下に搭載できる部品用リターナブルラックを開発しました。アクスルなどの大物部品や、従来は別コンテナで出荷していた部品をこのラックに搭載することで、コンテナ内の充填率を向上させています。これにより、40ftコンテナを年間約300本削減し、輸送資源の効率的な活用を図るとともに、国内外の輸送に伴うCO_2排出量の低減にもつなげています。

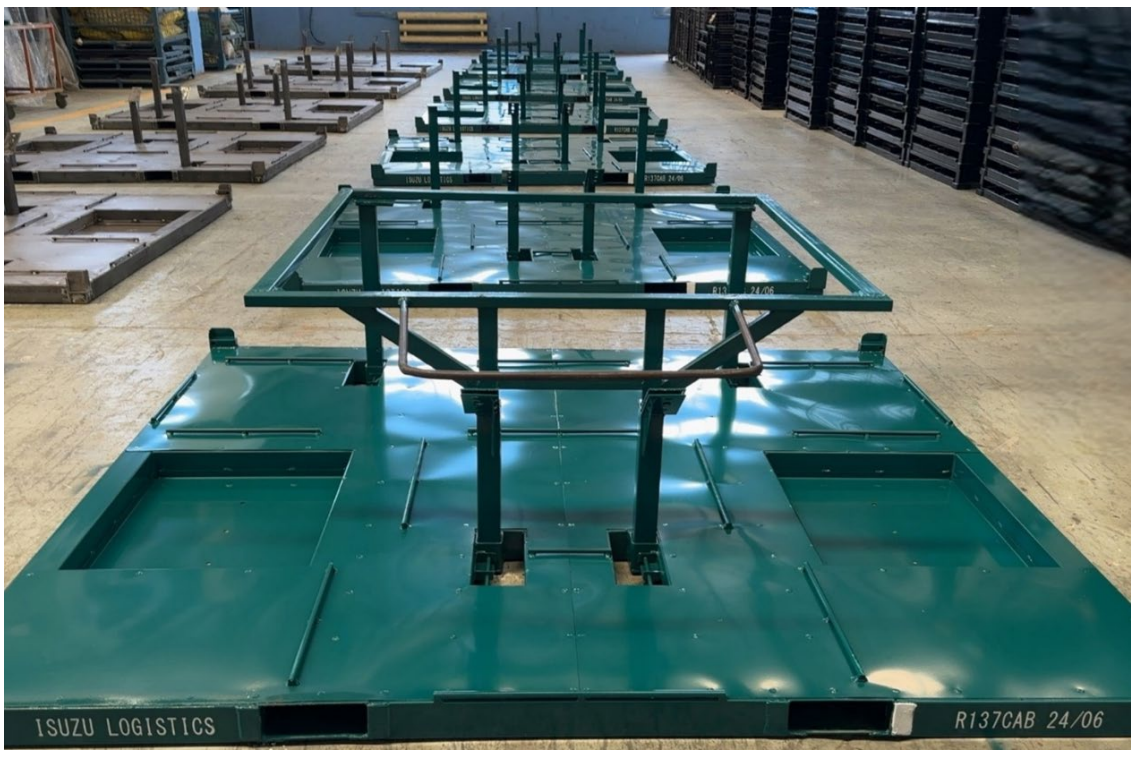
2024年度からは、新型モデル車に対応したキャブ用リターナブルラックの開発を進め、2025年度より追加導入しました。

2025年度のリターナブルラック使用枚数は全体で16万2千枚となり、ワンウェイ資材からリターナブル資材への転換を通じて、資源の循環利用をさらに推進しています。

今後も、リターナブル資材の活用拡大を通じて、資源使用量と廃棄物の削減、資源の有効活用に取り組み、循環型社会の実現に貢献していきます。



キャブ用リターナブルラック（黄色）
＋ 部品用リターナブルラック（グレー）



新規キャブ用リターナブルラック

ISUZU LOGISTICS

バイオマス資材の導入

いすゞロジスティクスでは、海外組立工場向けノックダウン（KD）出荷の包装資材に、植物由来のバイオ原料を配合したバイオマス資材を導入しています。

バイオマス資材は、原料となる植物が成長過程でCO_2を吸収することから、化石資源の使用削減や環境負荷の低減に寄与する資材として活用を進めています。

2017年度からは、年間約900万枚と最も使用量の多いA4サイズのポリ袋について、石油化学由来の資材からバイオマス資材へ切り替え、CO_2排出量の削減につなげました。

その後、他サイズのポリ袋にも展開を進め、2023年度には全10サイズのポリ袋をバイオマス資材へ切り替えています。

また、気泡緩衝材についても、2022年度から全16サイズを対象に、バイオ原料を約15%配合したバイオマス資材へ切り替え、環境負荷の低減を図っています。

さらに、2025年度には、バイオマス資材導入のさらなる展開として、発泡シートを石油化学由来製品からバイオ原料を10%配合した製品へ切り替えました。

導入にあたっては、資材メーカーから入手した物性報告書をもとに、品質面・作業面・安全面への影響を確認しました。その結果、従来品とほぼ同等の性能を有することを確認し、年間約76万枚、重量換算で約35t使用している発泡シート9品番について切り替えを実施しました。

今後も、石油化学由来の資材からバイオマス資材への切り替えを拡大し、環境負荷の低減と環境配慮設計を推進することで、持続可能な社会の実現に貢献していきます。



バイオマス資材

ISUZU LOGISTICS

コンテナラウンドユースの拡大（1/2）

いすゞロジスティクスでは、物流分野全体でカーボンニュートラルに向けた取り組みを推進しており、栃木、藤沢、横浜港、上尾の各エリアにおいて、コンテナラウンドユース（CRU）を実施しています。

CRUとは、輸入用コンテナから貨物を取り出した後、空になったコンテナを港へ返却せず、輸出用コンテナとして再利用する取り組みです。空コンテナの輸送を削減できることから、物流効率の向上に加え、輸送に伴うCO_2排出量の削減にもつながります。

栃木エリアでは、従来、栃木工場で梱包するノックダウン（KD）部品の輸出に使用する空コンテナを横浜港まで引き取りに行っていました。現在は、船会社が指定する栃木工場近隣の内陸デポにおいて、他社が輸入貨物を取り出した後の空コンテナを引き取り、KD部品の輸出用として再利用しています。

藤沢エリアでは、他社との協業により、輸入貨物を取り出した後の空コンテナを横浜港へ返却せず、藤沢工場近隣のいすゞグループ倉庫へ輸送し、KD部品の輸出用として再利用するCRUを実施しています。

また、2024年6月からは、いすゞグループ内でのCRUにも取り組んでいます。海外の組立工場から藤沢エリアへリターナブルラックを返却する際に使用したコンテナを横浜港へ戻さず、同一エリア内でKD部品の輸出用として再利用しています。これらの取り組みにより、空コンテナ輸送の削減を実現し、輸送時の燃料使用量を年間約2万リットル削減することで、輸送に伴うCO_2排出量の削減につなげています。



CRU KD出荷コンテナ内外

ISUZU LOGISTICS

コンテナラウンドユースの拡大（2/2）

さらに、2025年度には、新たに船会社1社とCRUに関する契約を締結しました。本取り組みでは、他社の輸入貨物の荷下ろし後に発生する空コンテナを港へ返却せず、KD部品の輸出用として再利用しています。これにより、年間24本分の空コンテナ輸送を削減しました。

これまでのCRU活動は、一般社団法人日本物流団体連合会より高く評価され、協業他社とともに、2022年度から2024年度まで3年連続で物流環境大賞「特別賞」を受賞しました。

今後も、グループ内外の関係各社との連携を強化しながら、CRUのさらなる拡大と輸送効率の向上を図り、CO_2排出量の削減と安定的な物流体制の構築を両立することで、持続可能な物流の実現を目指していきます。



物流環境大賞「特別賞」トロフィー

ISUZU LOGISTICS

輸送方法の見直し（1/2）

いすゞロジスティクスでは、製品・部品の輸送ルートの見直しや最適化を継続的に進めており、グループ間の共同輸送などを通じて、輸送に伴うCO_2排出量の削減に取り組んでいます。

従来は関西配送センターから奈良サービスセンターを経由して三重県内の部品センターへ配送していましたが、配送元を中部配送センターへ変更しました。これにより、輸送距離を約30km短縮し、CO_2排出量の削減につなげました。

さらに、物流の「2024年問題」への対応として、従来は一般道を利用していた藤沢地区から栃木地区への配送便について、往復便の全線を高速道路利用へ変更しました。これにより、輸送時間の短縮や燃費の向上を図り、輸送の効率化と環境負荷の低減につなげています。

2025年度からは対象範囲をさらに拡大し、他社や部品メーカーとも協業しながら、さらなる環境負荷の低減と輸送効率の向上に取り組んでいます。

生産拠点への部品補充便では、従来、毎週月曜日から金曜日まで10t車2台体制で運行し、1台は往復、もう1台は往路のみの運行としていました。他社との共同配送の開始に伴い、この運行体制をフルトレーラー1台による往復運行へ変更し、他社部品との混載によって積載効率の向上を図りました。

改善前は10t車2台の運行により1運行日あたりの延べ走行距離が1,380kmでしたが、改善後は920kmまで短縮しました。その結果、年間228便の運行を削減するとともに、年間約2万6000リットルの燃料使用量を削減し、輸送に伴うCO_2排出量の削減にもつなげています。



積載効率を向上した輸送状況

ISUZU LOGISTICS

輸送方法の見直し（2/2）

また、部品メーカーからの引き取り物流では、従来1日9便を運行していましたが、便ごとの荷量や運行時間に偏りがあり、輸送効率の向上が課題となっていました。そこで、2025年度に積荷配分や運行内容の最適化を実施し、共同便の運行体制を見直しました。これにより、便数を1日9便から7便へ削減し、年間488便の削減を実現しました。また、走行距離を1日あたり2,826kmから2,198kmへ短縮し、年間約15万3,000kmの削減につなげました。

さらに、トラック内の平均積載率を約60%から約80%へ向上させるなど、輸送効率を改善しました。加えて、ドライバーからも、荷量の偏りの減少や積載の平準化、運行内容の簡素化による作業負荷の軽減といった評価を得ており、物流効率の向上に加え、運行品質や作業環境の改善にもつながっています。

今後も、他社との連携を強化し、輸送ルートや共同物流のさらなる最適化、混載輸送の拡大を通じて、環境負荷低減と安定的な物流体制の両立を図りながら、持続可能な物流の実現に取り組んでいきます。



（改善前）便ごとの荷量に偏りがあった輸送状況



（改善後）積荷配分を最適化した輸送状況

気候変動対策

ISUZU LOGISTICS

物流拠点倉庫での環境負荷低減活動

いすゞロジスティクスでは、物流拠点の倉庫内においても、環境負荷の低減を進めています。軽油を燃料とするディーゼルフォークリフトから電動フォークリフトへの切り替えを進めており、2030年度までにディーゼルフォークリフトゼロを目指しています。
また、2024年度からは、栃木エリアの倉庫内照明を人感センサー付きLED照明へ更新し、無人時には自動で消灯する仕組みを導入しました。その結果、CO_2排出量の削減に加え、職場環境の改善にもつながっています。
今後も、設備の電動化や省エネルギー化を推進し、物流拠点におけるCO_2排出量の削減と環境負荷の低減を図っていきます。



電動フォークリフト



人感センサーにより無人時に消灯された倉庫

生物多様性保全

ISUZU LOGISTICS

植物発電「ボタニカルライト」を活用した社員参加型の環境活動

いすゞロジスティクスでは、生物多様性への理解促進と環境意識の醸成を目的として、植物の力を利用して発電する「ボタニカルライト」の活用に取り組んでいます。

ボタニカルライトは、植物が光合成によってつくり出した糖を、土中の根の周辺に生息する微生物が分解し、その際に生じる電子の流れを利用して発電します。

また、ボタニカルライトは、横浜市で開催される「GREEN×EXPO 2027」の公式教材にも採用されており、植物発電を通じてネイチャーポジティブ（自然を守るだけでなく、回復させていく考え方）について学ぶ機会にもつながっています。

2025年9月から社内の環境メンバーで導入に向けた検討を開始し、メーカーとの打ち合わせ、設置場所や活用方法の検討などを重ね、2026年8月より導入を開始しました。

導入後は、より多くの社員が植物発電や生物多様性について身近に感じられるよう、本社をはじめ複数の拠点で巡回展示を実施しています。

さらに、展示を見るだけでなく、社員から「環境保全への貢献」と「事業性」の両立につながる活用アイデアを募集するなど、社員参加型の取り組みへと発展させています。

各拠点から寄せられたアイデアは、社内のサステナビリティ推進会議で共有・検討し、実際の活用につなげていくことを目指しています。

また、植物発電の仕組みだけでなく、災害などの非常時におけるBCPへの活用可能性についても理解を深めています。

今後も、こうした体験型・参加型の活動を通じて、社員一人ひとりが生物多様性や自然環境と事業活動とのつながりを考える機会を創出し、環境保全への貢献と新たな価値の創出につながる取り組みを推進していきます。



ボタニカルライト

生物多様性保全

ISUZU LOGISTICS

生物多様性保全活動を推進

いすゞロジスティクスでは、いすゞ藤沢工場において近隣大学と協働で実施されている生物多様性保全活動に、2023年度より多くのメンバーが継続して参加しています。

いすゞ藤沢工場では、2013年から工場敷地内の動植物の調査を実施し、調査の結果、林地の手入れ不足により、生態系の偏りや外来種の繁茂が見られ、里山としての公益的機能が弱まっていることが確認されました。これを受け、大学からの助言をもとに、2016年度から在来種が生育するエリアを「エコアップエリア」に指定し、環境整備を進めています。2017年以降も継続的に調査を実施しており、外来種の減少や生態系の偏りに改善傾向が確認されています。

2026年2月には、活動エリアに生育する植物の状況や外来種の除去方法について、大学より専門的な視点から助言をいただくとともに、2025年度に実施した保全活動の成果を確認しました。いすゞロジスティクスのメンバーも参加し、専門家の知見を共有しながら、今後の保全活動につなげています。

また、エコアップエリアには、在来種である「ツルボ」や「シロヨメナ」が群生しています。工場敷地内でこのような群生が見られることは珍しく、その生育環境の維持・改善に取り組んでいます。いすゞロジスティクスでは、こうした活動への参画に加え、2023年度から、いすゞ藤沢工場内に自生するツルボ・シロヨメナを譲り受け、プランターに植え替えて自社で育成する取り組みも進めています。

今後も、いすゞグループの一員として、地域の生態系に配慮した活動を推進し、生物多様性の保全に貢献していきます。



いすゞ藤沢工場 エコアップ活動


譲り受けたツルボの開花


譲り受けたシロヨメナの開花

生物多様性保全

ISUZU LOGISTICS

かながわ水源の森林づくり活動

いすゞ藤沢工場では、2018年度から神奈川県の「森林再生パートナー制度」に参画し、同工場で使用する地下水の水源となる森林を守るため、南足柄市の「21世紀の森」や足柄上郡の「やどりき水源林」において保全活動を実施しています。

いすゞロジスティクスも、いすゞグループの一員として本活動に参加しています。活動では、健全な森林環境の再生に向けた間伐作業や自然観察などを行っています。間伐によって森林内に適度な光が差し込むことで、下草やさまざまな植物の生育が促され、生物多様性の保全につながっています。また、森林が雨水を蓄え、地下水や河川の水を育むことで、洪水の緩和や渇水時の水量の確保、地下水の保全など、森林が持つ水源を守る機能の維持・向上にもつながっています。

2025年9月に南足柄市の「21世紀の森」で実施された保全活動にも、いすゞロジスティクスのメンバーが参加し、間伐作業に取り組みました。こうした活動を通じて、生物多様性の大切さへの理解を深めるとともに、事業活動を支える水資源と、その水源となる森林を守ることの重要性を再認識する機会としています。

今後も、いすゞグループと連携しながら、水源林の保全を通じて、生物多様性の保全に貢献していきます。



インストラクター指導のもと、間伐作業開始



間伐した樹木の年輪（樹齢約12年）

生物多様性保全

自然素材を活用した生物多様性保全活動

いすゞロジスティクスでは、いすゞ藤沢工場および栃木工場で行われている生物多様性保全活動の一環として、どんぐりや松ぼっくり、つるなどの自然素材を採取する活動に参加しています。

採取した自然素材は廃棄せず、いすゞプラザで来館者向けに実施するワークショップや、毎年12月に開催される「クリスマスリース作り」ワークショップの材料として有効活用しています。

身近な自然素材に触れる機会に参加することで、生物多様性や自然環境への関心を高める取り組みにもつなげています。2025年11月には、いすゞ藤沢工場で実施された自然素材の採取活動に、いすゞロジスティクスのメンバーも参加しました。

今後も、いすゞグループの一員として、自然環境の保全と資源の有効活用につながる活動に継続して取り組んでいきます。



自然素材の採取活動



採取したツバキの実



採取した自然素材で作った
クリスマスリース

地球の「運ぶ」を創造する

ISUZU

ISUZU GROUP